

**令和 5 年度第 2 回高砂市文化財保存活用地域計画協議会
議事概要**

日	時	令和 5 年 11 月 28 日 (火) 13:30~16:00
場	所	高砂市役所本庁舎 4 階 405 会議室
資 料	会議次第	高砂市文化財保存活用地域計画協議会 名簿
	資料 1-1	: 令和 5 年度第 1 回高砂市文化財保存活用地域計画協議会 議事概要
	資料 1-2	: 令和 5 年度第 1 回協議会における主な会員指摘事項と対応
	資料 2	: 令和 5 年度第 1 回文化庁協議における主な指摘事項と対応
	資料 3	: 自治会・中学生アンケート結果とりまとめ
	資料 4	: 建造物・まちなみ調査の中間とりまとめ
	資料 5	: 高砂市文化財保存活用地域計画 (素案) <第 5 章まで>
	資料 6	: 目標・方向性・課題・措置案
	資料 7	: 今後のスケジュール

● → 協議会会員発言

○ → 事務局発言

1. 開会 (事務局)

2. あいさつ (教育長)

●お忙しい中、高砂市に来て頂き感謝する。第 2 回高砂市文化財保存活用地域計画協議会では皆様から色々なご意見を頂き、保存・活用の基本方針や具体的な措置を定めて参りたい。8 月に開催した第 1 回協議会では、高砂市歴史文化基本構想の検証や文化財の保存・活用の課題について貴重なご意見を頂いた。今回は、皆様から頂いたご意見を整理・見直ししたものをご確認頂くとともに、今後の保存・活用の目標や課題・方針・措置についてご意見を頂きたい。本日も、忌憚のないご意見をお願いしたい。

2. あいさつ (会長)

●今年度第 2 回目の協議会だが、地域計画の素案について皆様と協議を進めたい。この間、新聞報道等もあったが、9 月 22 日に土木学会の理事会において、高砂市内の高砂港向島突堤が選奨土木遺産に認定された。初代の工楽松右衛門から 3 代目にかけて、江戸時代末に工事が行われ出来上がった土木遺産である。本日も、忌憚のないご意見をお願いしたい。(会長)

3. 報告

(1) 令和 5 年度第 1 回高砂市文化財保存活用地域計画協議会の協議内容

(2) 文化庁協議について

○資料 1-1・資料 1-2・資料 2 について、事務局より概要説明。

- 「発展的解消したものであり」を「より具体的に発展したものであり」と修正したということだが、計画が自動的に発展することはないので、「発展した」よりは「発展させた」のほうが良いのではないか。(会員)

⇒ご指摘の通り修正する。(事務局)

- 素案図1の下部に記載されている文化財に関する赤字の説明は残すのか。(会長)

⇒このまま残す予定である。(事務局)

- 前回の協議の中で、総合計画のサイクルに合わせていくという話があり、今回の案では計画期間が5年間に修正されている。図3をみると、次の総合計画ができるまでに地域計画を改定することになっており、総合計画の策定の進捗具合と地域計画の進捗具合がうまくリンク出来るかどうか少し気になる。企画課とスケジュールをすり合わせておくべきである。2029年度に総合計画の概要がある程度出来ているのであれば問題はないと思うが、そうでなければうまく調整ができないのではないかと思う。(会員)

⇒総合計画を担当している企画課と相談し、次回協議会でその結果を報告する。(事務局)

(3) 自治会・中学生アンケートの結果について

○資料3について、事務局より概要説明。

- このアンケートは、中学生もかなり答えており、これからの世代の担い手育成に役立つヒントがたくさんあると思う。今後何かしら使われる具体的な活用方法があれば教えてほしい。(会員)

⇒まずは、事務局が把握していなかった市民が大切に思っているものが把握できたので、その内容を今回の計画に反映する予定である。また、自由記述欄でも様々なご意見があり、関心があまりない中学生にどのように関心を持ってもらうのかを検討し、計画に反映していきたいと考えている。(事務局)

- ➡実際に集まったデータを、回答した中学生にフィードバックする予定はあるか。(会員)

⇒2月に住民説明会を実施する予定であり、アンケート結果の報告を行う機会としたい。(事務局)

- ➡意見の一覧を見せて、こんな意見もあるのだということを中学生が共有することで、次の展開につながるのではないかと思う。また、知っている・行ったことがある場所への愛着が沸いているということが分かったので、そうした機会を増やす必要があると思う。(会員)

- 同種の調査を以前福崎町で行った記憶があるが、その調査では中学生の興味・関心の割合がもう少し高かったと記憶している。高砂市では、興味・関心のある中学生の割合が30パーセントに達しておらず、これはかなり低いのではないかと思う。小学校での地域における総合的な学習の成果が中学生の素養に影響してくるものだと理解しているので、小学校における学習の中身をもう一度見直す必要があるのではないか。行ったところが興味・関心につながるというのはその通りで、自治会と中学生の行ったことのある場所の回答を見比べると、中学生は石の宝殿の回答が多く、市内のほぼ全員の中学生が知っている。これは、石の宝殿について特に学校教育がなされているのか。それとも、それぞれの家庭での教育の影響なのか。一方で、工楽家や十輪寺、時光寺等については行ったことのある率が低い。学校教育で教えていれば、石の宝殿と同じように率が高くなるのであれば、教育の中で反映する必要があるのではないか。また、松陽中学校の西側にある鹿島川の桜並木等も、春にはかなりの人が歩いており、市民にすごく親しまれているのに、あまり情報として表に出てきてい

ないというのが不思議である。計画を作る際には自然環境等についても情報の出し方を再検討する必要があると思う。(副会長)

➡石の宝殿に行ったことがある中学生が多いということについては、おそらくお正月の日の出を見に行った経験があるなど、家庭での行事が影響しているのではないかと思う。また、石棺を作って埋める等、学校での石の文化の学習もおそらくつながっていると思う。もう一つは、市のPRも割と関係していると思う。日本三奇の「浮石」はかなり発信しているので、子どもたちにもイメージが強いのではないか。おそらく中学生は「文化財」という言葉に対して寺やお宮等の建物しかイメージがないと思う。そのことを踏まえてアンケートを行うに当たっては説明が必要であったと感じている。関心の度合いについて、私の感覚では30パーセントは普通ではないかと思う。ただし、自由記述では、「知りたい」とか「もう少し広めてはどうか」という回答が多かった。今は30パーセント程度であるが、もう少し興味・関心が広がる素養があるのではないかと思う。小学校では歴史学習としてあちこち見学もしているが、思い出として頭に残るような学習のさせ方が必要ではないかと思う。中学生になると、意外と地域のことを学ぶ機会が少なくなるので、小学校だけではなく中学校での学習の方法を考える必要があると感じた。(会員)

●祭りは子どもも含めて家族全員に喜んでもらえる。私も、「大人になって出ていっても、盆正月は帰ってこなくてもいい、祭りのときは帰っておいで」と言われて育ってきた。地域では、祭りに参加する・見るということが精神的な支えになっている部分が大いだと思う。ある自治会長の孫が帰ってくるとなったときに、荒井神社の青年会に参加したいという話も聞いた。アンケートをみると、有名どころだけでなく、身近な文化財についても結構大事に思っている。祭りは、女性も男性も子どもも老人も何か役割があって良いものだと思っていた。しかし、中学生のアンケートでは、祭りの後ゴミだらけである、喧嘩が多いなどの意見もある。私たちの世代は喧嘩を見て育っているので当たり前前の光景が、今の中学生からするとマイナスの要素である。文化財を引き継いでいこうと思うと、若い人にとっても魅力のあるものである必要があると感じた。今回のアンケート結果は、持ち帰って自治会内でみてもらおうと思うが、若い人が安心して参加できるような行事に、祭りの在り方・伝え方を変えていく必要があると思う。(会員)

●このアンケートは非常に生な感覚が出ていると思う。市内の文化財の訪問経験を聞いているが、聞いている意図と分析の結果に少しずれがあると思う。問の意図は、文化財として意識して訪れた経験を聞き、文化財に対する感受性がどこまで潜在的にあるかを図るということだと思うが、回答は神社や祭りが主になっており、自己経験の発露の部分が大いだと思う。だから、必ずしも文化財としてとらえきれていないのだろうと思うが、むしろそれが大事ではないかと感じた。アンケート結果を乱暴にまとめると、高砂市民は文化財を祭りだと思っているという印象を受けた。祭りが文化財のトップクライオリティに来ているのだということは、すごく大事なことだと思う。コミュニティシンボルとして祭りをとらえるのか、宗教活動としてとらえるかは議論になる部分であり、施策に落とし込むには難しい点もあるが、この結果は非常に重要である。自治会への間で、困っていることとして、「文化財の保存・活用のための資金不足」や「情報発信がうまくいっていない」という回答が多かったとあるが、これは、具体的にはどういうことか。祭りに関心が高いということは、祭りを続けていく上での支援を手厚くしてほしいということか、あるいは純粋に古いものが痛んできていることに対する危機感なのか。(会員)

➡高砂市民は確かに文化財を祭りと呼んでいると思う。宗教活動というよりは地域活動の一環ということで、補助金制度を活用してヤッサの改修などを行っているが、一方で祭りの保存・活用には困っている。祭りはもちろんだが、それ以外にも保存・活用すべきものがたくさんあり、その打ち出し方も考える必要がある。(会員)

●高砂市民は文化財といえば祭りという感覚は良くわかる。一方で、その他の分野の文化財に対してのプライオリティにもものすごく差があるということも感じる。例えば、工楽家や花井家等、市が率先して整備しているところに、市民が自然に乗ってくるにはどうすれば良いのか。今のやり方では、難しく、何らかの違う仕掛けを考えないといけない。(副会長)

●地域計画が出来上がってからフィードバックするのではなく、今回のアンケート結果もある程度まとまっているので、A0ポスターに印刷したものを図書館に貼ったり、QRコードを貼り出して継続的に情報を発信して意見を救い上げる仕組みを作ること、市民の意見が計画に反映されているという空気感を計画作成の段階からつくと良いのではないかと。そうしたことは可能か。(会員)

⇒イベントなどの人が集まる機会に広報活動ができないか検討したい。(事務局)

➡特に小学校や中学校等はポスターを貼ってしまえば良いと思う。(会員)

⇒学校については、担当課と相談する。(事務局)

●知って頂く方法・手段ということで、すべての文化財という形ではないが、観光面からスタンプラリーなどを行っている。アンケート結果をみると、各地区で身近にあるものには興味・関心を持たれている。その中で生石神社が地域を超えて回答が多いが、観光ビューローとしても生石神社は映画の撮影でロケ地になったことを発信したりして、表に出ることが多い場所であり、そうしたことも関係していると思う。竜山石の関係では、地元の米田小学校や阿弥陀小学校などでは、教育委員会を通じて出前授業や採石場の見学を行っている。実際触れてみることで記憶に残りやすいのではないかと感じている。(会員)

➡観光施策として、観光資源の近くにQRコードをおいて、読み取ればすぐに説明が見られる等のシステムまではまだ実施できていないのか。(会長)

➡インバウンド対応も含めて各地区・各場所で説明版を作っており、一部ではQRコードを活用した外国人に対応する説明案内の取り組みもしている。(会員)

➡実現している箇所はあるということか。(会長)

⇒そうである。高砂町界限ではデジタルマップも作成している。デジタルを利用しながら高砂市行政と一緒に、多くの市民に知ってもらおうきっかけを作り上げていっている。(会員)

●様々なことが読み取れるアンケートで面白い。定期的に今後も続けて取り組まれると良いのではないかと。自治会はそんなに年を経ても変わることはないかもしれないが、中学生はどんどん人が変わっていくので、年によって違った結果が出てくるかもしれない。中学生に向けて何か取り組めば、何年後かに反映されるので、施策の効果をみるという意味でも良いと思う。PRや広報が足りない、あるいは小学生の教育についての意見があったが、私が以前いた石川県金沢市の21世紀美術館では、毎年小学校5年生は必ず1回そこに行くようにプログラムされている。それも、美術館がバスを持っていて、小学生を順番に送り込んでいる。その際に入場券を2枚渡し、「今度はお父さん・お母さんと来てね」と伝える。そうすると、リピーターで親を連れて帰ってくる。その結果、市がそうした取り組みを行っていることをある一定の年代全員が知っているということになる。高砂市です

るとなると費用の事もあるのですぐには難しいかもしれないが、学校での教育だけではなく、PR に関しても参考になるのではないかと思う。小学校3・4・5年生は、世界が広がって外に目が向き始めるころなので、その時期にこのような教育を行うとすごく効果があるようである。(会員)

(4) 建造物・まちなみ調査の中間報告について

○資料4について、事務局より概要説明。

●分布図としてのまとまりはまだ見せられる状況ではないのか。(会長)

⇒今回はお見せできないので改めてご提示する。(事務局)

●中間報告とあるが、今後数字が変わってくるということか。(会員)

⇒数字は変わらないが、調査結果のまとめや、今後についての提案を現在まとめてもらっているところである。(事務局)

●この結果はどこかで市民にフィードバックする予定はあるのか。(会員)

⇒地域計画資料編には掲載する予定である。(事務局)

➡計画作成の途中の段階で、教育委員会のホームページに掲載したりはできないのか。(会員)

➡市民があまり触れたことがないデータが今回出てきている。10年で30パーセントも歴史的建造物がなくなるというのは、平均以上のスピードであり、対策が必要ではないか。文化財審議委員会でも一度検討する必要がある。また、生涯学習と社会教育が一緒になって市民への情報提供についても検討する必要がある。(副会長)

●地域計画を何のために作るのかを市民に知ってもらうためにも、市民と今のまちの状態や課題を共有する必要がある。それから、情報を受け取ってまちの一員として何をするのかを考える市民を増やしていく必要がある。人口が減少する中で、フリーライダーのような市民ばかりが増えても何も戦力にならない。自分事のできる市民を増やすことが重要で、そのような主体性を育むには小さいころからの教育や情報発信も重要である。今の危機感をどこまで共有できるかで、勝っていく市か、負けていく・消滅していく市かが決まるので、早めに色々な方法で発信していかないと間に合わないと思う。それぐらい日本は危機的な状況なのではないかと思う。地域計画も専門家が読むだけでなく、小さい子でもある程度分かるようにしておいてちょうど良いと思う。(会員)

●今回のデータで影響しているかはわからないが、空き家対策法が2015年にできて、元々古民家だと認識されていた空き家が、法律によって急速に壊されているという話もある。その部分は少し認識していても良いのではないか。(会員)

●私は、古い町並みを見に行ったらカメラに収めるのが趣味なのだが、どんなにひなびたマイナーな場所に行っても、平日でも同じような人がいる。古い町並み等に興味があるマニアはたくさんいる。それなのに、古い民家などが壊されているということの原因の一つには、私たちの普段の生活に取り込めていないということがある。入江家は私も好きで何度か行くが、いつもボランティアが色々説明してくれる。また、近所の人がお菓子を焼いて販売していたりもして、近所の人も利用している。ボランティアは強力な応援団だと思う。情報の共有ももちろん必要だが、地域の生活の中にどのように取り込んでいくか、ボランティア講座でいかにボランティアを育成するかも重要ではないかと思う。もちろんイベント等で知ってもらう仕掛けも必要である。(会員)

4. 協議

(1) 文化財の保存・活用の目標と方向性について

○初めに～第3章の前回からの修正点について、資料5を用いて事務局より概要説明。

●「近代化を乗り越えた」という言い回しは気になる。そもそも「近代化」とは何かという話になる。工業都市として発展したり、海辺の再生を進めてきたことも含めて歴史として捉えることはできないのか。50ページの説明では、「近世以前に発展した歴史文化を基盤として」となっており、近代で歴史が分断されているような雰囲気になっている。他のまちでも、江戸までは歴史だと思っていて大正・昭和等が歴史の対象から外れてしまう例がよくある。この文章を読むと、ニュアンスとしてはそのように感じてしまう。近代もうまく包括して考えていくほうが良いのではないか。(会員)

⇒内容としては近代化を基盤として今現在も続いているというテーマである。(事務局)

➡そういう意図がわかるように書いたほうが良い。近代を特別視する必要があるのか。(会員)

➡私も「乗り越えた」は違和感がある。「乗り越えた」は「克服した」という意味になるので、近代がネガティブな要素として表れている。環境問題を大事に思う現代的な意識をもって、克服して勝利を得たというストーリーにするのであればそれでも良いのかもしれないが、時代の流れはその時その時の人が最善だと思ってとってきた戦略の積み重ねなので少し違うのではないかという気がする。悪者をやっつけたというニュアンスに近いと読めてしまう。今のまちの基盤はこの時期に整備されているものであり、今のふるさと感はこの時期がなかったらと思う。それを唾棄するのはどうなのか。(会員)

➡これは、「近代化の課題を乗り越えた」という意味ではないのか。(会長)

➡小学生の時は海に泳ぎに簡単に行けていた。中学生の時に関西電力が人工地盤を作り始めてから海に行けなくなり、基本的に面白くなくなった。腹いせに私たちはクラブが終わると、松村川に飛び込んでいた。その川は、ザリガニが死骸になって浮いているような真っ黒な水だったが、平気で飛び込んでいた。それが、30年ほど経ちものすごく変わった。護岸周辺や向島にも公園ができた。もう一度人工環境を再整備しなおそうとして、ものすごくドラスティックに変わったと感じている。(副会長)

➡それは近代化なのか。近代化とは違うように思う。(会員)

➡近代化の過程において調整してきたことが、乗り越えてきたことだと思っている。公園の土地も単純に出てきたわけではなく、様々な人の協力があったのもであり、そういうことから、「乗り越えてきた」というイメージを持っている。(副会長)

➡昭和に生まれた私も、入れていたところが入れなくなったという経験はあるが、近代化を乗り越えたというイメージはない。(会員)

➡各時代の様々なフェーズで乗り越えているので、近代化だけ「乗り越えた」は違うのではないか。(会員)

➡一番後の時代を乗り越えて今がある。それ以前の時代は前の人達が乗り越えてきた。(副会長)

➡残り4つのテーマとのバランスが悪いのではないか。(会員)

➡このテーマだけ、ジャッジが見えるということではないか。(会員)

➡「工業から●●へ」とか、「工業都市から●●都市へ」とかのほうが良いのではないか。高度経済成長期もその時代だと思うが、それは近代化というイメージはない。工業化は近代化なのか。(会員)

- ➡近代化の最後のころで、厳密には、高度経済成長期は現代だと思う。(副会長)
- ➡会員は、十輪寺で長い歴史の変化を見られてきていると思うが、そういう視点に立って何か今の議論に対してご意見はないか。(会長)
- ➡今の高砂は工業都市で、それが行き過ぎたのもう一度自然を作ろうとしている。工業化に合わせて住みやすいまちづくりを進めてきたので、乗り越えるとなると少し違うような気もする。江戸時代も工樂さんが埋め立てしており当時の近代化があった。以前の高砂町がどうだったかは我々も想像がつかない。環境の変化に伴いながら、人々の暮らしがあったのだと思う。(会員)
- ➡「近代化を乗り越えた」はもう少し表現を検討したい。ただし、私達の世代で高砂市で育った人は似たような感覚を持っていると思う。(副会長)
- ➡PCBの問題もあった。(会員)
- ➡私も「乗り越えた」と感じている。PCBの時には高砂のすし屋に行っても魚がなかった。「ハムを握ってくれ」とか一時はそんな状態であった。そういう時代は乗り越えたと思う。(会員)
- ➡近代化の中身をもう少し表現したほうが良いということではないか。(会長)
- ➡工業化してきたという言葉を出しすぎると、隣の市町に住んで高砂に通うということになる。(副会長)
- ➡様々な課題を乗り越えている高砂だから「いらっしやい」ということかと思う。(会長)
- ➡工業都市からの脱却とは違うのか。(会員)
- ➡現在も工業都市は工業都市である。(会員)
- ➡「乗り越える」試みは高砂流で積み重ねてきていて、市民的合意のもとに今があるのだと思う。(会長)
- ➡内容として書くのは問題ないが、「乗り越えた」というテーマの在り方が刺さりすぎるような気がする。他の地域計画では、近代化はすごく輝かしいものとして書かれている。(会員)
- ➡「乗り越える」という言葉は、「困難を」などの後にくる。それぞれの時代に、それぞれの人が努力されてきたという話はその通りだと思う。工業化する前、高砂町はかなり衰退の一途にあった。それを何とかしようとして工業化し、衰退を乗り越えようとした努力はあったと思うので、近代化だけ乗り越えたというのは違和感がある。(会員)
- ➡そのことはぜひ伝えるべきだと思う。いろいろな先人がそれぞれの立場でネガティブな部分を乗り越えながら今がある。今の若い子どもたちは、今の環境が常態なので、そうした歴史を知ってもらうことも大事だと思う。(会員)
- ➡この辺りは継続議論としたい。(会長)
- ⇒次回、修正した案を出して再度ご意見を頂きたい。(事務局)
- 歴史文化の部分についても、子どもが読んでもわかる内容になれば良い。(会員)

～休憩(14:40～14:45)～

- 目標と方向性について、資料5を用いて事務局より概要説明。
- 先ほどのアンケート結果は課題としてここに反映されているのか。例えば、中学生が知らないということがアンケートで浮かび上がったと思うが、そのあたりはどうか。(会員)

⇒具体的には、まだ現状と課題に盛り込めていない。(事務局)

●目標に、「新たな地域文化の創造」という言葉があるが、方向性の中では、創造の内容がどこに入ってくるのか。(会員)

⇒方向性3「活かす」の中に位置付けている。(事務局)

➡活かすだと、「あるものを使う」というニュアンスになる。もう少し、創造的なニュアンスが欲しい。この4つの方向性でまとめると難しいかもしれないが。(会員)

➡方向性4「支える」について、担い手育成と書かれているが、人が色々な形で組み合わせさせて創造するという話だと思う。地域全体で「支える」ではなく「創る」としてはどうか。(副会長)

➡人によって意見が分かれると思うが、「ひとづくり」という言葉に違和感がある。昔は育てるという表現をしていたと思う。こうした計画で使うときには少し言葉を意識しても良いのではないか。(会員)

➡「支える」は担い手だけに集約するのではなく、経済も必要だと思う。ふるさと納税でも、使い道について目標・目的を立てている自治体もある。高砂市でも、文化財がターゲットになるような形でふるさと納税を行うとか、クラウドファンディングを行うとか、そうしたことも意識できるような記述としたほうが良い。文化財を活かしながら経済が回れば、豊かになると思う。(会長)

●アンケートの中で、自治会の課題として「文化財に関する情報発信がうまくいっていない」の回答が多かった。方向性1～4では、情報発信に関することがあちこちにばらまかれている。もう少し、情報発信について強くメッセージを出しても良いのではないかと思う。また、方針2の最後に「第8章」と書かれているのが少し気になった。(会員)

●方向性1で歴史文化を「知る」というのは当たり前のことだと思う。歴史文化を「知らせる」からスタートではないか。調査は当たり前なので、普及を一番目に持ってきてはどうか。また、「活かす」は現代的な機能を付与するということである。現代的機能をどんなものにするか考えていくときに、地域の愛着と関連させるなど総合計画でも受け入れられやすい内容となれば良い。(副会長)

●方向性1～4の主語は何か。(会員)

⇒行政・専門家だけでなく市民も含めたい。(事務局)

➡主語を明確にする必要がある。例えば、「知る」の主語が市民であれば、調査や普及も市民が担うことになる。(会員)

➡主語・主体は多様だと思う。行政の計画だから行政が責任をもつという話ではない。それぞれの役割と分担がある。(会長)

➡その場合はぼやかすのではなく、行政と市民がパートナーとして取り組むというメッセージを明記すべきである。(会員)

●方向性1の調査については、専門的な人々による歴史的な事実の調査と、シビックプライドを醸成する共有物としての認識の2つの要素がまじりあっているから分かりにくいのではないか。文化財や歴史を学んでいる人が調査するのは当たり前だが、その内容をシビックプライドにもっていくためには市民も無関係ではないというメッセージを出さないといけないと思う。言葉遊びかもしれないが、「知る」は「識る」という表現もある。(会員)

➡スポーツ文化の定着では、「する」・「見る」・「支える」の3つの立場が必要である。「する」はスポーツをする人、「見る」はスポーツを見る・応援する人、「支える」は運営したり、お金を出す人である。

4つの方向性に落とし込むと、「知る」と「守る」は「する」だと思う。「見る」はよそから高砂に注目する主体で重要である。「支える」はもちろん行政が中心かもしれないが、様々な人が楽しみながら応援していくというイメージがある。例えば、万灯祭は年に2日だけだが、高砂のまちのショーケースとしての役割を果たしている。方向性1は「知る・伝える」という表現でも良い。(会長)

●方向性4では、関係人口という言葉が使われているが、「ファンを増やす」等の表現のほうが子どもなどにも伝わるのではないか。少し難しい言葉である。(会員)

➡行政的な評価、KPIを意識した表現かもしれない。(会長)

➡アンケートの対象者にフィードバックするという意味でも、中学生タイプの概要版等を作らないといけないかもしれない。(副会長)

●目標に、「新たな地域文化」と書かれているが、地域文化とはどのようなイメージか。イベント的なものなのか。そのイメージが共有されてこそ、方向性が出てくるのではないかと思う。(会員)

⇒目標は、前回の歴史文化基本構想の内容である。第4次総合計画の「新たな文化を創造し、ふるさと意識あふれるまちづくり」という記述を引用した。現行の総合計画も踏まえて再整理する。(事務局)

➡一般的に、地域文化の前には、「新たな」ではなく、「魅力あふれる」などとすることが多い。総合計画と言葉を合わせてもらえればと思う。(副会長)

(2) 文化財の保存・活用の課題・方針・措置(案)について

○資料5、資料6について事務局より概要説明。

●これらの措置は他部局と調整済みなのか。(会員)

⇒他部局との調整はできているところとできていないところがある。(事務局)

➡調査や指定は何のためにするかというと、文化財のためだけではなく高砂市にとって重要でプラスになるからである。そのことをどれだけ多くの部局と共有できるかが、施策を広く展開していく上で重要である。調査・研究はほとんど生涯学習課が担い、その他を他部局が担うという組み立てとなっているが、それでは持続的な施策にはならない。切り分けすぎるともったいない。(会員)

⇒調査・研究では、主管課が生涯学習課になっているが、関連する部局や市民が参画する場合もあるので、もう少し具体化できるように見直したい。(事務局)

●施策44では工場夜景を活かしたイベントとあるが、工場は歴史文化の中に組み込んでいるという認識で良いのか。(会員)

➡市域には、古い工場もある。(会長)

⇒そうすると、歴史文化の特徴での工業都市の話は、もう少し措置につながる様を書く必要がある。(会員)

●高砂は工業都市で、パテントを多く持っているような有名な企業がたくさんある。しかし、私も子どもころから、海辺の工場で何を作っているのかなどは教えてもらわなかった。唯一親が働いていた神戸製鋼だけは見学に行ったことがある。例えば生野だと、企業のイメージを持ち上げるような施策が入っていたりする。せっかく商工会議所が入っているので、この機会に、高砂市内の企業が持っているパテントの数等の調査ができれば良い。(副会長)

➡企業がずっと同じ地域に居続ける保証はない。しかし、そこにある必然性や歴史的な価値がある程度容認されると、いなければいけなくなるということもある。そのため、彼らの中のアイデンティテ

ィに訴えかけるというのも大事である。そういう意味では、産業遺産等のこれまでの歩みを文化的にきちんと抑えるというのは変な話ではないと思う。特に「乗り越えた」高砂であればなおの事大事である。(会員)

⇒土木・近代建築以外にも、工場や企業が持っている様々な技術等を調査できるようにしたいと考えている。(事務局)

➡高砂市では、コンソーシアムができているので出ていけないという企業も多いと思う。企業の生き方やノウハウについても評価しても良いと思う。(会長)

5. 今後のスケジュールについて

○資料7について、事務局より概要説明。

6. その他

○特になし

7. 閉会（事務局）